

創立60周年
since 1962

東京バッハ合唱団 月報

【第721号】2022年7月号

〒156-0055 東京都世田谷区船橋 5-17-21-101

Tel: 03-3290-5731 Fax 専用: 03-3290-5732 郵便振替: 00190-3-47604

Mail: office@bachchor-tokyo.jp http://bachchor-tokyo.jp/

BACH-CHOR, TOKYO

Monthly Newsletter No.721

July 2022

5-17-21-101 Funabashi,
Setagaya-ku, Tokyo

第121回定期演奏会・創立60周年記念公演、絶賛のうちに終了 ご来場者アンケート回答

創立60周年記念の第121回定期演奏会は、5月14日、東京・荻窪の杉並公会堂で開催されました。

前回の公演は2019年5月だったので（第118回、府中の森芸術劇場）、実にまる3年ぶりの本格公演でした。コロナ禍のため、第119、120の2回の公演が、やむを得ず中止にいたった経緯は、月報紙上でもお伝えしたとおりです。

今回は、座席の前後左右を空席とし、かつ全席を指定席とするなどの感染防止策をほどこして当日を迎えましたが、さまざまな不自由のなかでも、約300名のお客様がご来場くださり、配布のアンケート用紙（回答、全48通）には、以下のような熱烈なご感想をお寄せくださいました。

そのうちの幾つかをご紹介します。曲名、演奏者等の詳細は、次ページ<終了報告>をご参照ください。

■演奏全般について、ご意見をお聞かせください：

- ・合唱が素晴らしかった。最後まで感激して聴いていました。心が洗われました。
- ・バランスのとれた良い演奏。
- ・第21番、深刻化・長期化するウクライナ情勢に世界中が憂いを共有している現実と重なる思いだった。心に愛と光明を覚えるすばらしい演奏。3曲が重なり合った見事な構成でした。
- ・豊かなハーモニーとメッセージに感動。
- ・バッハの曲の壮大さが分かった。
- ・心が久しぶりにおだやかに、やさしくなりました。
- ・代表的な曲（BWV21, BWV1, BWV147）、ぜいたくな時間。



■指揮・主宰の大村恵美子
（左写真）
■BWV21では、総勢51名の演奏陣を率いた（上写真）
ステージ前方に並んだ花鉢は60周年記念の演出（主宰者から出演者へのプレゼント）。終演後に全員が持ち帰った。
・写真提供：パラビジョン



- ・アマチュアとは思えないとってもすばらしい演奏。人の心を打つ演奏とは、まさにこのこと。「主よ人の望みの喜びよ」の曲のところで胸が熱くなり涙が……。
- ・主宰のコンダクター、永年の活動に絶賛です。楽器の演奏がバッハの曲らしく良かった。
- ・合唱は人数以上の迫力。
- ・演奏の奥ゆき、厚み、また60年の歴史に感動。
- ・とても感動し、今の心情にぴたっときました。
- ・コロナの中、練習も大変だったことと思います。
- ・指揮に見惚れた演奏会。ウルウルしました……。
- ・合唱、ソロ、素晴らしい。大村先生のパワーに感心しました。驚きです。
- ・60年、大村先生の情熱に、皆さまよくついていきました。
- ・すごくきれいで、ハーモニーを楽しみました。とくに合唱は素晴らしい。神への讃美と感謝、分かります。

■とくに、日本語演奏について：

- ・最後に唱和した147番コラールの日本語に胸が熱くなった。
- ・やはり日本語の演奏は、意味がわかり良かった。
- ・日本語のほうが心に残る。
- ・カンタータ21番5曲、「風と波たけり」のところは知床沖の遭難の状況を思い起こしました。日本語演奏のおかげで感動が深まりました。
- ・母国語で、意味の分かる形で聴けるのは新鮮。
- ・音楽と言葉が一体になって、理性を介さず、無意識

月報2022年7月号 CONTENTS

- ・随想「児童と私」（大村恵美子）/トルストイとプーチンとバッハ（西村清志）/西川豪コンサート（風岡和子）
- ・連載：退屈するのはいそがしい [17]（大野博人）…p.4

の感性に直に届く語りかけに、いくども涙があふれました。日々の思い悩みや祈りと直に結びつく感覚は、母語ならではのものです。

- ・他に類を見ない活動に感服。
- ・訳詞が良く、わかり易かった。ソリスト陣も大村訳をよく歌いこなしていた。

■その他、本日の運営全般、会場等について、何でも：

- ・すばらしい会場で、金管楽器、ティンパニーも入り、とても華やかな王宮でのバッハらしい音楽をたっぷり聴かせていただきました。
- ・最後にアンコールで一緒に歌えたことが良かった。
- ・カンタータ 147 番第 10 曲のコラールを歌えて感謝。家でも歌おうと思いました。
- ・バッハ合唱団ファミリーという雰囲気が感じられて心地よい。最後のコラールは感動！
- ・舞台に鉢植えを並べた演出も、素朴で良かった。
- ・先生、皆さま、どうぞこれからもお元気で音楽の贈り物を私たちに届けてください。
- ・スタッフの方も感じが良く、会場もきれいで気持ち良い。

※前号月報(6月号)掲載の椿高明氏寄稿「記念公演のステージを共演」もあわせてお読みください(◆参照！)

< 終了報告 >

第 121 回定期演奏会・創立 60 周年記念公演

[日時] 2022 年 5 月 14 日 (土)、14:00 開演

[会場] 杉並公会堂大ホール

[曲目] J.S. バッハ (日本語上演・大村恵美子訳詞)

- ・カンタータ第 21 番《われは憂いに沈みぬ》
- ・カンタータ第 1 番《あしたに輝く たえなる星よ》
- ・カンタータ第 147 番《心と日々のわざもて》

[演奏]

独唱：光野孝子(S)、谷地敏晶子(A)、鏡貴之(T)、山本悠尋(B)

管弦楽：A R S (コレギウム・アルモニア・ス・リオレ・ジャパン)

オルガン：室田千晶、合唱：東京バッハ合唱団

指揮：大村恵美子

[後援] ドイツ連邦共和国大使館、杉並区

*

上記、成功裏に無事終了いたしました。ご来場の皆様、ご支援をいただきました皆様に、こころよりの感謝を申し上げます。

また、コロナ感染対策のため、種々のご不便をおかけしましたが、終了後 1 カ月、さいわい出演・来場・開催関係者のなかに感染の報告はございません。ご協力に対し、改めまして厚く御礼を申し上げます。

●当日の録音・録画メディア

CD：2 枚組 2000 円、DVD：2500 円、ブルーレイ：3100 円
(税込・送料別、事務局へお申込みください)

●YouTube にて公開 (7 月 1 日からの予定)

<https://youtu.be/IA-pkoM3V2k>

児童と私

大村 恵美子 (主宰者)

近頃はあまり外出しないが、たとえば待合室などで腰かけて順番待ちをしている間など、隣りに母親と一緒にいる児童とその母親に「今日は混んでいますね」などと声をかけると、母親は「そうですねえ」と言い、連れの男の子は、私をじっと見つめる。私は膝のリハビリに来たのだが、その子に「あなたはどうしたの?」と訊くと、「ぶつかったんじゃないのに、こっちの足首が痛くなったの」と言う。

そんな短い対話のあとも、その子は私をずっと見つめ、互いに距離を置いたスペースに移動しても、遠くから私を見ている。私は微笑を向けるだけだが、もっと話したいのかしら? こういう場面が、外出時によくある。

別の例だけれど、前のほうから母親と一緒に、たどたどしく、しかも一生懸命に歩いてくる、やっと歩き始め位の坊やがいたので、「よく歩いて、えらいえらい」と褒めると、私の顔を大まじめで見据え、遠くなるまで振り返っている。「まだ見ているよ」と連れの者がおかしがっている。

こんなことがよくあるので、私は、どうしてなのかな、と考え、子どもは、おとなから声をかけられたことが初めてに近く、それが珍しくて、相手に関心を寄せたのかも、と思ったりする。知り合いの子どもが説明するのだが、「普通のおとなは、子どものことなど目に入らないで、それに話しかけたりしないよ、だから、自分に話しかけるおとなが珍しいんでしょ」、と。一般におとなはそんなに子どもに無関心なのか? では、私のほうが子ども好きだから、子どももそれに応じてくれるのだろうか。よくわからないが、いずれにしても、私は、憎たらしいように騒ぐ子どもでも、見るからに可愛い子どもでも、子どもなら、つい見つめてしまうことは確か。でも、そのほうが、間近にいた子どもが何らかの危害に逢うことが少ないのでは? 他人のことは、とにかく分からない。

やはり、壊れそうな危なさ、痛々しさを感じるものだから、私は児童の存在から目を離すことが出来ないのかも知れない。

トルストイとプーチンとバッハ

西村 清志 (後援会員、元団員)

トルストイに、自ら選んだ歴大な箴言集『文読む月日』という作品があることは、正直いって知らなかったのですが、大村恵美子先生のおすすりもあって、どういものか読んでみました(ちくま文庫、上中下)。

トルストイ自身のことばもありますが、聖書をはじめ多岐にわたる書物や著作から、トルストイが選んだ

ことばをまとめた内容になっています。これを読むと、この大作家の基本にある価値観がよく見えてくるように思いました。

私なりにまとめてみますと、トルストイは、真・善・美、そして博愛（キリスト教に深く根づいている）を基本価値としてものごとを判断しているように思います。とりわけ博愛には重きをおいていたように見受けられ、彼にとってはキリスト教信仰が最大の柱であったにちがいないと思います。しかし、同時に、現実はそのとはあまりに矛盾しているということが、彼の作品の基本テーマでもあったように思われます。

トルストイは歴大な作品を残し、反戦・非暴力などを説き、当時の社会に大きな影響を与えましたが、社会の本質がそれによって変わったわけではないことは、おそらく充分認識していたのではないのでしょうか。そしてその現実の矛盾は、現在のウクライナ戦争でも厳然として残ったままです。プーチンの傍若無人の振舞いにはローマ法王といえどもどうすることもできないで、ただ祈るばかりです。まさに、ことばは無力です。というよりは、プーチンのようにことばを悪用すれば、多くの人間を感わし、戦争という悪の極みにまで引きずりこんでいってしまいます。

今年 90 歳の詩人、谷川俊太郎さんが最近、「“ことば”の持つ“意味性”が真美の表現のジャマをしている。大切なのは、宇宙の存在の意味を正確に感じられるような作品を作ることだ」という主旨のことを語っておられるのを聞いたのですが、要は“ことば”など信用するなということ。それが、一生を“ことば”とつき合ってきた詩人の最晩年の感想なのですから、重みがあります。作品の形態は、文字、音楽、絵画や空間芸術と様々であっても、肝心なのはそれが何を表現しているのか、具体的には、この宇宙に存在しているということはどういうことなのか、を鑑賞者に伝えているかにあるように思います。

そこで思いつくのは、多くの人がバッハを聴いていると、「宇宙を感じる」あるいは「無我の境地になる」と、よく口にされるという事実です。それはバッハの価値の本質をついているように私には思えます。

最後に、今のプーチンの振舞いを見て、トルストイは何と言うだろうかという思いがちょっと頭をよぎったのですが、彼はおそらくプーチンを諭すような無駄はしないと思います。願わくば、ただひとこと、「バッハを聴きたまえ。そして宇宙（神）を感じなさい」と言ってほしいと思います。



■写真：千葉光雄（団員）

田中克彦さまから、おたより（2022.5.31）

合唱団の催しの御案内をいろいろといただいておりますが、出席できません。というのは、この6月末から7月はじめにかけて、シベリアの研究所がやる学会設立100周年に何とか出席するためです（ロシア科学アカデミー・シベリア支部）。

ロシアには飛行機が飛ばなくなったので、まずモンゴルまで飛び、それからバスないしは、北京からモスクワへ行くシベリア鉄道に乗って越境しようという魂胆です。この目途が立ったんだが、バス12時間は、この御老体にはかなりこたえそうです。ですが、シベリアのウクライナ人たちにも会いたいし……。

こういう心さわぐ日々を送っている一方で、孤独老人の日常を維持するのも楽ではない。食事、買物、ソージ（ほとんどしない）、洗濯など。

そんなことで、とにかくうたを歌っている皆さんをうらやむことしきりながら、ぼくは、毎日ロシアその他の人たちをのりしりながら日々を送っている。ウクライナの民謡っていいですよ！

[田中氏は、団友・言語学者。2015年の「3.11被災地訪問演奏・南相馬公演」には団員として参加し、難曲モテット3番（BWV227）などを歌われた]

～西川豪サロンコンサートをきく～

今どきのトーク&ヴァイオリンコンサート

風岡 和子（団員）

「私たちエンタメ業界（若者コトバ!）もコロナ禍で苦労し……」と数分にわたる演奏者自身のトークが1曲目のあとに始まった。自分の置かれた状況や不穏な世のなかを慨嘆し、駆けつけた客への感謝を忘れず、作曲家や曲目の解説が続く。クラシックコンサートの堅苦しさを取っ払い、演奏者と客の距離を少しでも縮めようとする努力がにじみ出る。かつてショパンやリストが貴族のサロンの中心でピアノを弾き、女性たちを熱狂させたという図柄を思いだす。館（やかた）の広い応接間の雰囲気再現し、演奏者と客の親密さが深まる。しゃべった直後すぐに演奏に集中できるのかというこちらの心配は杞憂、そこは現代っ子（この言葉も死語!）涼しい顔で美しい音楽の世界へ私たちを引き入れた。

前半は小品を3曲（シューマン、ヴィエニャフスキ、ブロッホ。ブロッホは最近よく取り上げられる）、圧巻は後半に置かれたリヒャルト・シュトラウスのヴァイオリンソナタだ。私の好きな歌曲「セレナーデ」がそのままヴァイオリンとピアノに乗り移ったような、華やかで濃密なメロディと華麗なピアノ伴奏。ヴァイオリンのテクニックもさることながらピアノも負けてはいない。二人は競いあいながら、作品の頂点へと上りつめ、客の心をワシヅカミにし、音楽の喜びで満たしたのだった。（ピアノ佐野隆哉、2022年6月10日、代々木上原ムジカーザ）

◆上演歌詞対訳は、当団HPからご覧いただけます。
http://bachchor-tokyo.jp/japanese_words/index.htm

タクシー

安曇野閑人 大野 博人

先日、実家がある兵庫県の明石市に行った。

小さなショッピングセンターの前でタクシーに乗った。あたりは山間部を切り拓いて広がった住宅街。まがりくねった坂道を縫ってマンションや一戸建てが並んでいる。

バッハの複雑な楽譜を鮮やかに演奏する名手のように、狭く入り組んだ道で巧みなハンドルさばきを見せる30代くらいの運転手に「かなり急な坂が多いね」と声をかけると、「そうなんです。そやからこのへん、空き家がけっこうあるんですわ」という。

「みなさん若くて元気なときに家建てはったんですけど、先のこと考えてなかったんですね。年とったら坂道ばかりでかなわんちゅうて、ほかに引越しはる人がぎょうさんおるんです」

なるほど。

「それでも、まだ一人で住んではお年寄りも多い。買いもの荷物かかえて帰るのしんどいから、タクシー使ってくれますねん。私なんかそれでもうけさせてもろてます」

でも、ショッピングセンターからずいぶん近いよね。そんなに稼げる？

「基本料金660円の距離でも、そんなお年寄りが次々乗ってくれはるから、わりとええ商売になります。それにチップくれるおばあちゃんが多いんですわ」

チップ？

「タクシー降りても、玄関まで階段上がらなあきませんやろ。それで荷物を持ってくれへんか、頼まれるんですわ。ええですよ、いうて手つどうてあげたらおつりいらんいうて1000円くれるんです。そんなお年寄りいっぱいいますから」

「それにね、いまどきはタクシーの運転手も年寄りがほとんどでしょ。おばあちゃんたちに荷物持ってくれて言われたら、ちょっといやそうな顔してしまうんですわ。そら、運ちゃんたちも年取ってますからしんどいですよね。そやけど、僕はまだ若いから平気ですねん。ニコニコしながら持ってあげたら、そらよろこんでくれますわ」

常連のお客さんもいるのでは？

「ショッピングセンター前の乗り場で待ってるタクシーの中で、僕が飛び抜けて若いんです。そやから、僕の車が先頭に来るのを待ってるおばあちゃんもおるんです。前のタクシーが出て行って、僕が先頭になったとたんに、そこら辺の物陰からおばあちゃんたちがワラワラ出てきはるんです」

「タクシーもスマホで呼べるデジタル時代かもしれませんが、おばあちゃんたちはそんなん使えません。

頭は昭和ですから。そやから僕はアナログ時代のやり方で対応してあげるんです。それで引っぱりだこ。ほんま、僕は幸せやなあ思いますねん」

タクシー運転手との世間話から、日本社会の身も蓋もない現実が浮かび上がる。まるでシンプルな旋律が宇宙を連想させるバッハの無伴奏チェロ組曲みたい。

そういえば、安曇野に移ってのんびり田舎暮らしを始めてからは、タクシーに乗ることがほとんどなくなっていた。

思い返すと、いちばんタクシーのお世話になったのは記者時代。九州でサツ回りをしていたときは、事件が起きると現場に駆けつけるのに利用した。いつも使う会社には、巧みに渋滞を避けて現場に向かうのが得意な運転手が何人かいた。その一人は、左手の小指がなかった。

「若いころ、やんちゃしてまして」

あるとき、彼の車で火事の現場に急行。取材をして回っても原因がよくわからない。だが、とりあえず弊社して第一報を書かなければ。待ってもらっていたタクシーに戻ると、彼が教えてくれた。

「大野さん、あれは放火ですよ」

「やんちゃしていた」時代の人脈で、駆け出しの記者なんかよりずっと早く、現場にいた野次馬や警察官から正確な情報を集めていたのだ。それからは、事件が起きるたびに、彼が運転するタクシーが回ってくることを願うようになった。

タクシーからディープな世間が見えてくる。安曇野でも、もう少しタクシーに乗ってみようか。

(団友・後援会員、元朝日新聞記者)



■明石の住宅街の中のタクシー乗り場。意外と回転が早い(写真も筆者)

[編集後記]

・地上の様子は3月号のこの欄のまま、すなわちコロナとウクライナ。合唱団は7月1日に満60年を迎えますが、祝賀の気分にはほど遠い感じ。それでも、静かな、小さな祝会を予定しています(7/2)。今号西村清志氏の一喝「バッハを聴きたまえ。そして宇宙(神)を感じなさい」が効くといいのですが……。 (K)